繪本太閤記

三編　九

特
へ伊13
1833
2733

繪本太閤記三篇巻之九

目録

小田右大臣御生害之話
山本三左衛門本能寺の築地を跳る圖
信長公自ら敵を防ぎ戦ふ圖
安田作兵衛信長公を撃し奉る圖
森蘭丸討死の圖
信長公凶変之話
同圖
高野山の衆徒信長公を調伏の圖

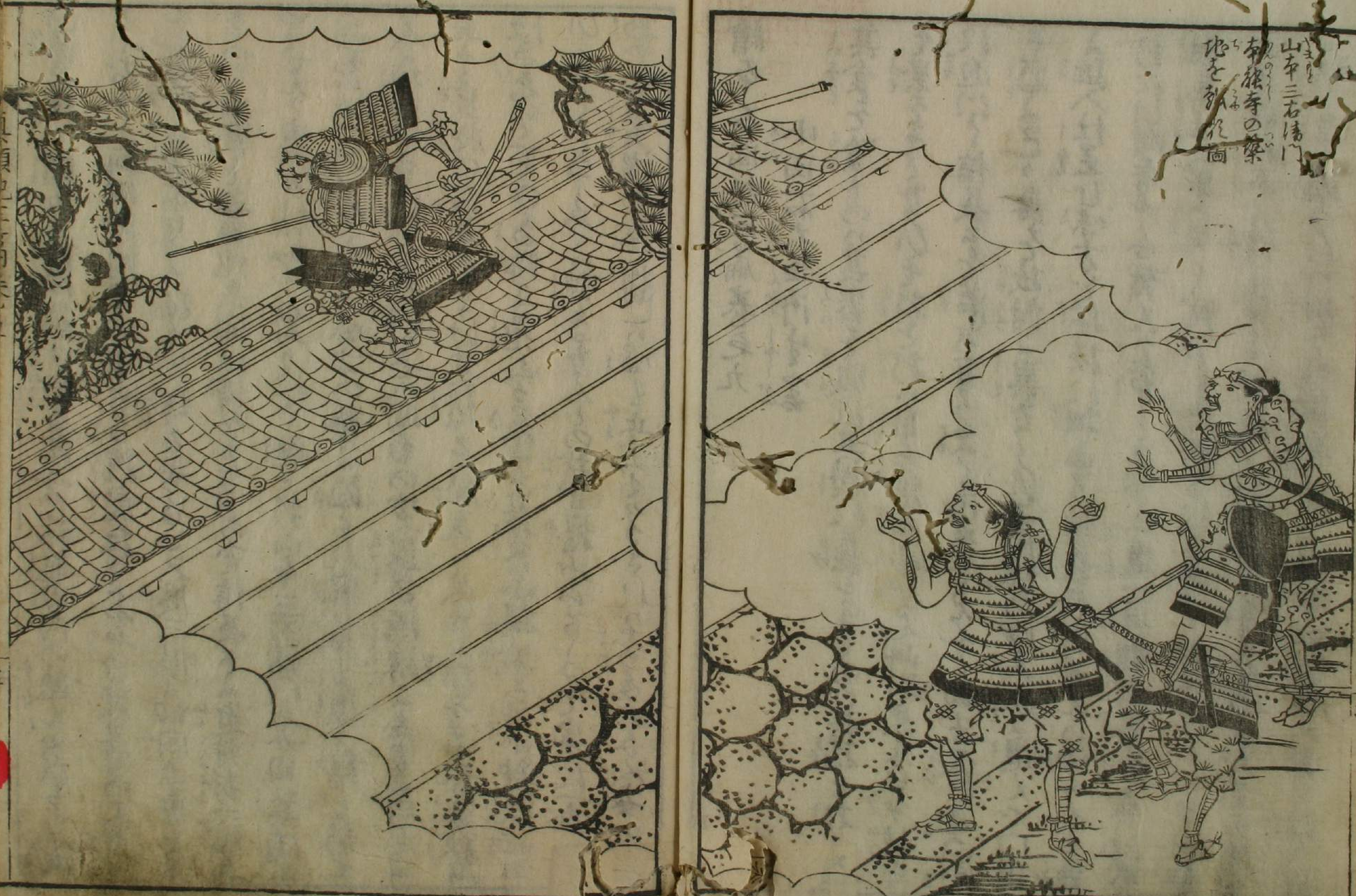
明智左馬介遠慮之話
伍子胥楚王の墓を穿く圖
惟任光秀圍室町城話
信忠卿半途より二条の城に入給ふ圖
梶原松千代病疵を懐んで二条の城に籠んとする圖
明智治右衛門最期の圖

池田郷土文庫

繪本太閤記三篇巻之九

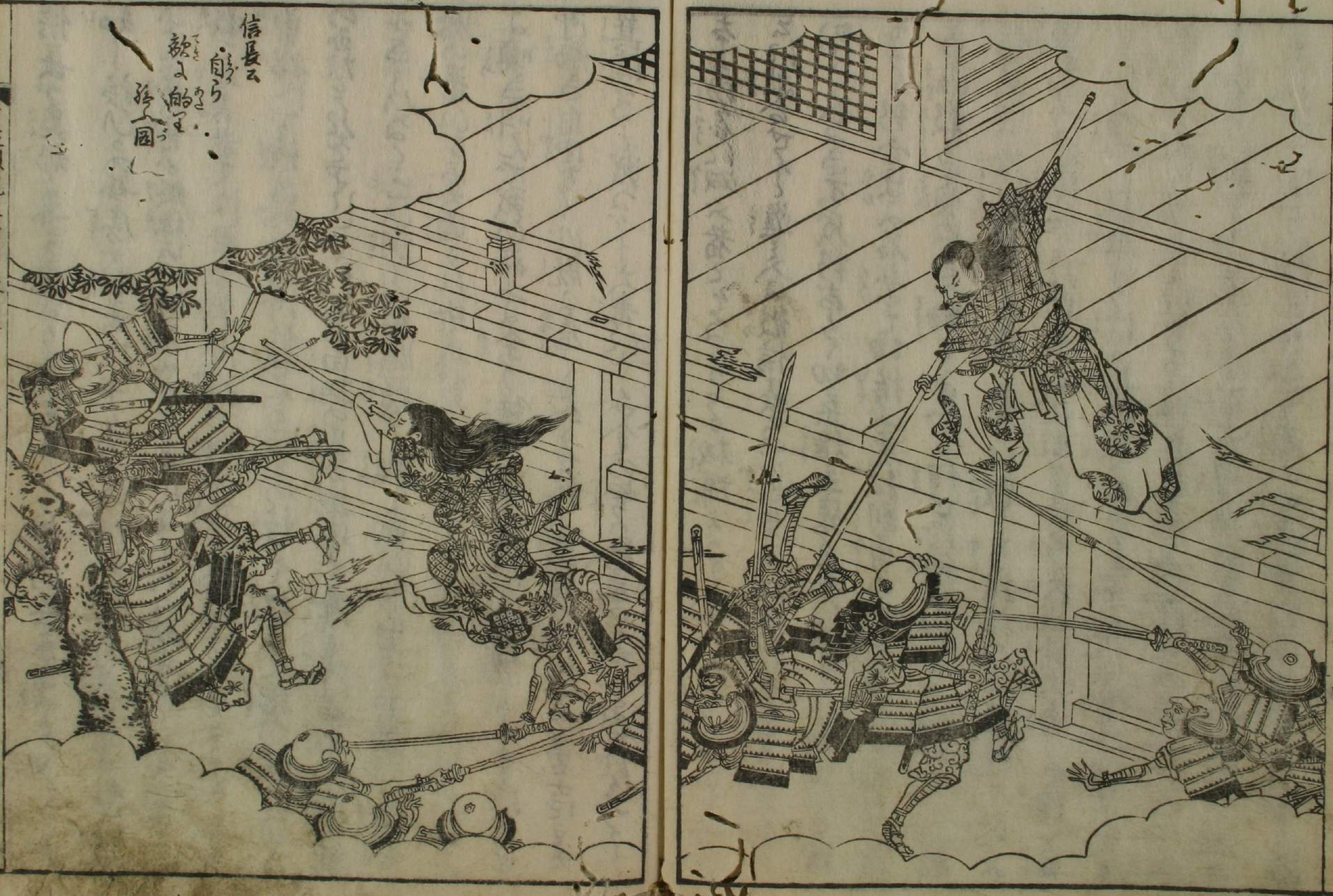
小田右大臣御生害

其食を喰ものハ其器を毀ず其樹に蔭るものハ其枝を折らず主恩を忘ることなかれ枝をおれバ自ら禍を需るに此明光秀本能寺に迫り信長公を落しめすべく御着とりんとぬる士に令して討せしむるに己が身を攻討に異ならしめ安田作兵衛光に進んで門内に近入仕寄む味方を横に押ゆる信長公の御着を備らんと馳行に此時寺中合戦喜蔵中と見へしく一進一退離散合戦ハ討死討身を寄せて大軍入乱く戦へども御所方にも績く新手もあらバこそ御勢大半討死今ハ纔に百人に十騎に討なされ手に落手負ざる者に乱れ色眺みれバ袖を切捨裸になり堅甲利兵の大軍を防ぎ戦


山本三右衛門
南禅寺の築
地を越飛図

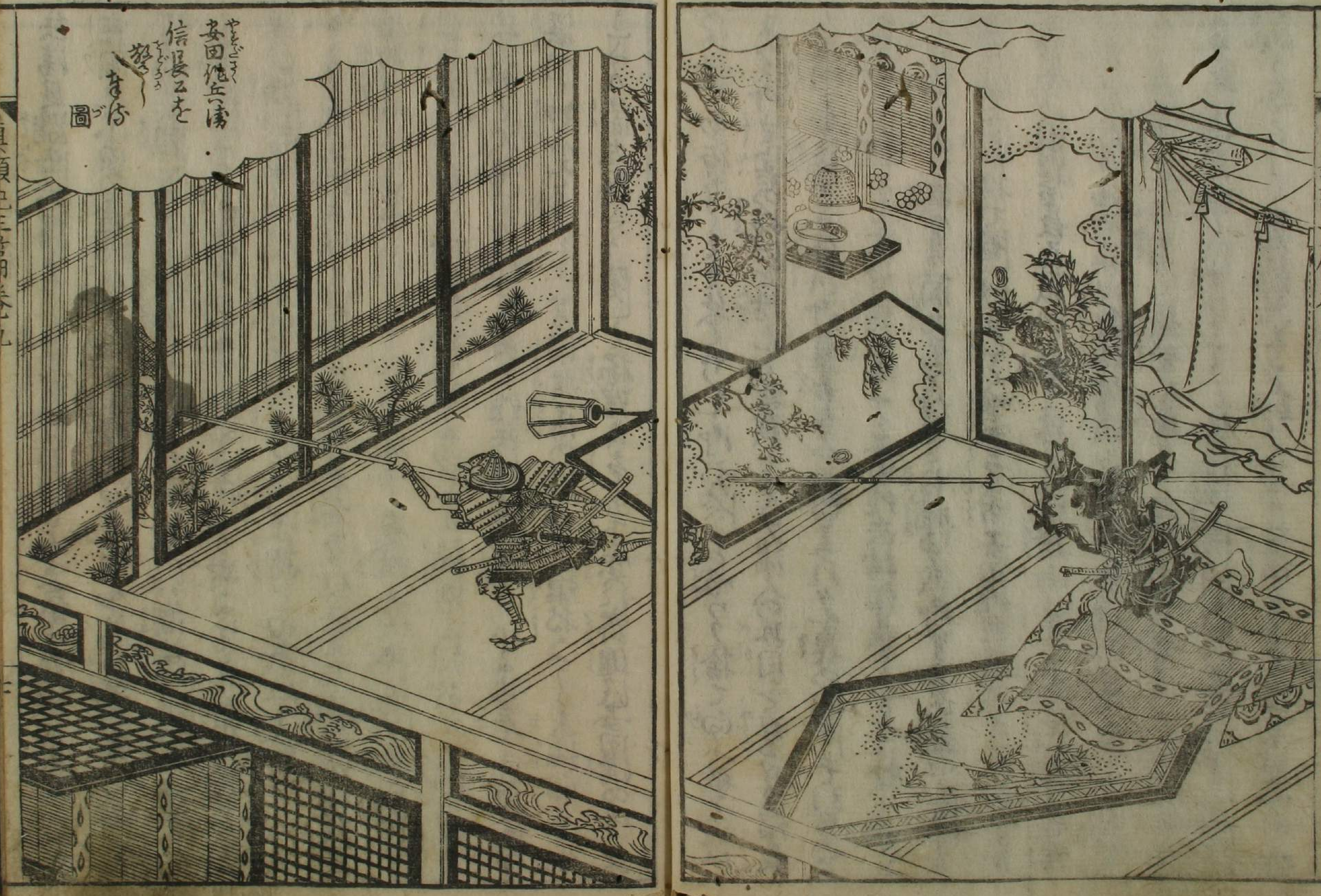
め流るゝ汗に湧出る血汐ハ地に紅をなしてさながら龍田川の紅葉をひちて流
す。かゝる処に御所方の勇士なる樫虎松と名乗る三尺九寸の大太刀
を打振り甚不口より踊り出群る寄手を又眼三眼に切倒し勇とふ
るゝ血戦を安田作兵衛は体をかはすとみへたが信長公に近付寄る一槍ま
ゝらせんと思ひけれバ紅にぬれてにくく進み行山本三右衛門は安田笹ノ浦に
ち二本に門へのかんとせしが味方の勢に隔られ容易も進み得ず行て
いくよ功を奪はんと大門を七八間南の方へ退き溝際に立寄其一本よ
立ける足軽の肩に手をかけ其侭に飛立て左ようと槍を右にて杖に
はき是へ一寸も這る塀に飛上る其方ある奥兄小揚威大袖小袖菱縫の
ひらりくと言つゝやハ鰈る方んどの威を揺ぶらうて実に一真え三
抱やと賞讃の声路しハ鳴も止ず作ろさしが寄手三千人安田山

本が功名に双ぶ者てそなかりける樫塀よりも早く飛下り是も信長
公に組合せんと進み入に彼信長公の近侍なる樫虎松大太刀を生向ひ
かぢしんなき不敵なかなく切立難立来る所に山本三右衛門と名
乗り組合ふよ名乗て切結ぶ虎松剛勇の壮者なれども敵将の戦
手疵数多負ねまハ働く事心に任せず終に山本に討れける此附
信長公は廣縁の際に進み出給ひ雑兵も弓射給ひしに武運も既に
尽給ひなん弦給へに切れて飛散ければ弓矢投捨大音して槍を召
され唯へも奥殿より出けるが其の夜なる三十計の女房鎌十文字
の槍を捧て信長公に奉る信長公是を御覧し長谷川宗仁や在
る石に於て御前に来れ迄命を結信長公給ふるハ汝ハ武士に非ざ
れバ歎も是を殺さじ女子を悉く召連今の間に早く落延


信長公自ら敵よ的て弦之図

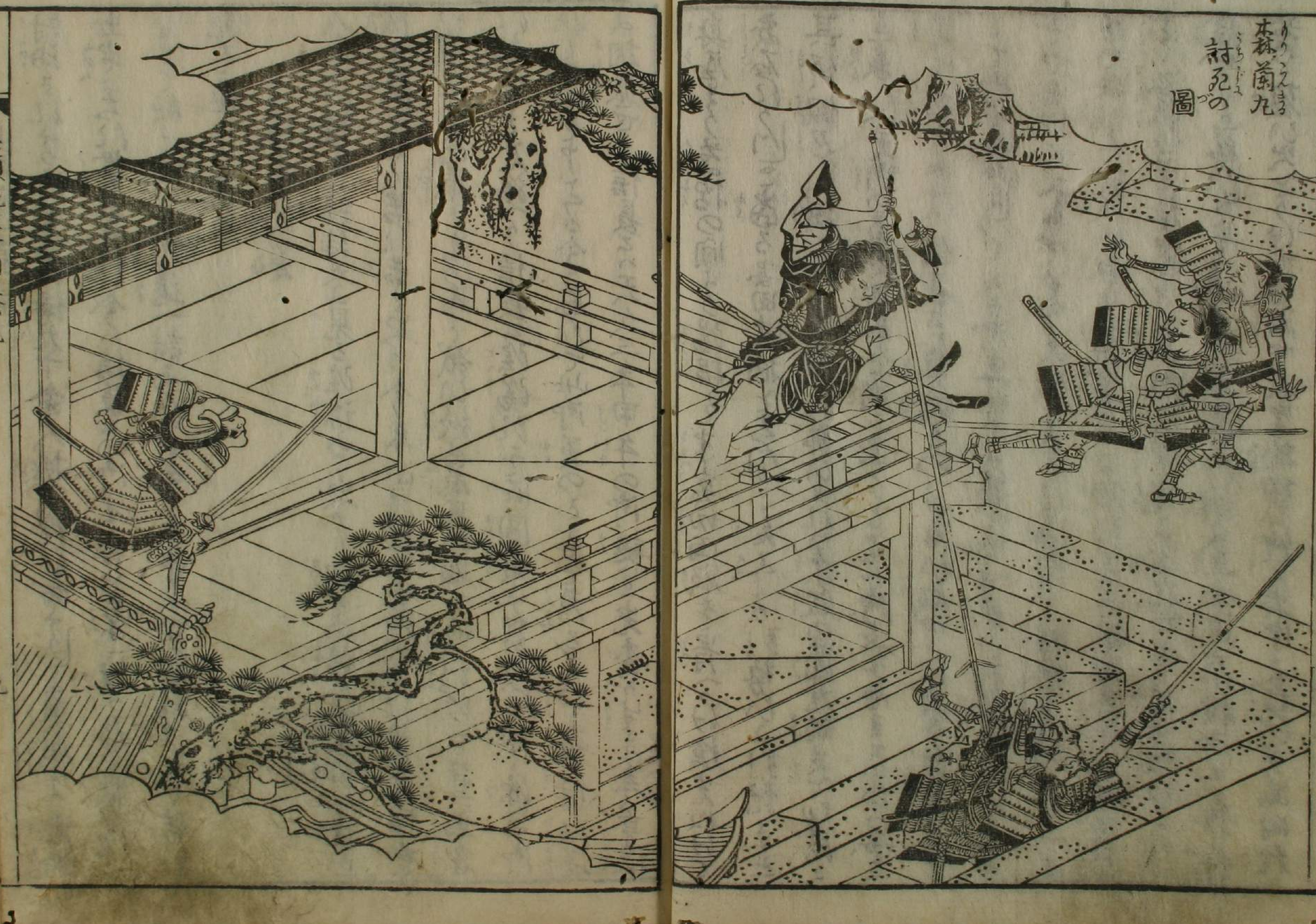
信長が采配に女を連らうといへども此上の女を見よく〳〵と下
知し給ひける女房がおよりし十文字の鎗押取て自ら来る故に向
ひ十六歳の若か婉然と鋒先にまでく肉に十五六疵たゞく〳〵と突出し
殺て進寄者も此附に玄蕃御鎗を捨し女房は於能の方にて女ゟ希なる
勇婦しが終に冥途の御供せんと二本の鉢巻を襷て結び流花田を
のむたちをすしく引志め白柄の長刀擢込んで廣庭に走出て当る故
をまるひるゝくヒひ倒し薙立進挑で戦ひしが山本三右衛門に渡合
腰の番ひを突通され終に討死しける右大臣信長公は御勢ひ当ん
に喚き叫んで戦ひ給ふに余り強く当りを左の臂にきずつけば突せ
御働き自由ならで既に危く見へさせ給ふに蘭丸は惟任方の勇士四五天
甚浦等ると戦ふが大音にく手合の者は離れ退のゐるに発せゞ

の御戦ひ理窟なくてそ叶へ参らく御介しと呼はり捨て向ふ敵を追ひ
まくり御生害の妨げを防がんと悪戦なりける諸人の耳目を驚せり信長
公は蘭丸が侍そめに随ひ御自害をや遊せられん奥の間さして引せ
玉ふ所に萬蔵といふ者追を手に合せ伺ひ居たる安田作兵衛は信長公へ入させ給へと声を
かけ鎗とつて追来る蘭丸是を見て之は稀なる武御生害の際心えぬと
当の敵を打捨て追かけに乙と喚き立寄安田作兵衛止まれとまて
うけ立此附信長公は戦ひを好み給へ捨ふして一間に入らせ給ふ
く侍子と云給ふ此附に於て燈消じて信長公の御落ゆくと
まる安田蘭丸を目当にし残るも通りに障子越に突かけしが何かへ
手ぎは鎗先鋭くに中らず思ひ障子蹴破り入来りて後より
落ちおどろく森蘭丸を見ん刀に取りつけ鎗を上て突不意安田


安田作兵衛信長公を弑し奉る図

兵清足踏速し心得たりと槍打合せ戦ひける安田ハ明智が股肱乃勇士蘭丸ハ小田の逸物龍と躍り虎と跳て上中下透間なく飛違ふて戦ひしハ然しもたる形勢之蘭丸其日の出立にハ黒梅に露の丸を白く染たる素袍を着太刀計りを帯したり時に生年二十二歳安田ハ思ひ設けし事なれバ黒皮の具足に肩草摺を白糸にて威したるを着たりける安田作兵衛も実ゆる剛勇の若者なれども蘭丸が必死の戦ひに始終叶ふべくも見ざれバ心中に是と感じ右へ流し左へ拂ひかし進んで太刀に退き窮められたる場数の功者須臾くに椽側を引納を蘭丸続て只一突と大喝一声叫で突と作兵衛心得後さびに大庭に飛下りしが深間く切石を畳み上たる雨落の溝の中へ槍持ながら表向にぞ倒れたり蘭丸得たりと覚えしと椽端に立出下突に突通し安田溝の中に

身屈まり草摺の間より陽根を末突切両股を背へかけ槍先ぬけて敷石に刺したる安田其柄を走りかと取り引つ引勢ひに引起さんとし其後佩刀を引抜て後手なぐりに拂ひければ素肌の蘭丸両足を切落され哀れむべし太剛の勇士枯木を倒すがごとく轉ぶを見て兵清走寄て首をかきたり信長公ハ奥深く入せ給ひ殿中に火を放ち其中にて御生害ましましける御年四十九歳嗚呼悲き哉今日ハいかなる日ぞや去る天文年中より今天正十年まで四海の内に横行し武威を以て天下の兵乱を切鎮め民を塗炭の中に救ひ四方の敵国其英名を畏伏のごとく恐振ひ正二位右大臣に昇進し大業既に成就せしを逆臣惟任か為に弑せられ給ひしこそ口惜けれ次第之御側に在合近士小姓御馬廻りは焼草を蔽ひ火をうけて皆股十文字に掻切て猛火の中にとびいりし此附於



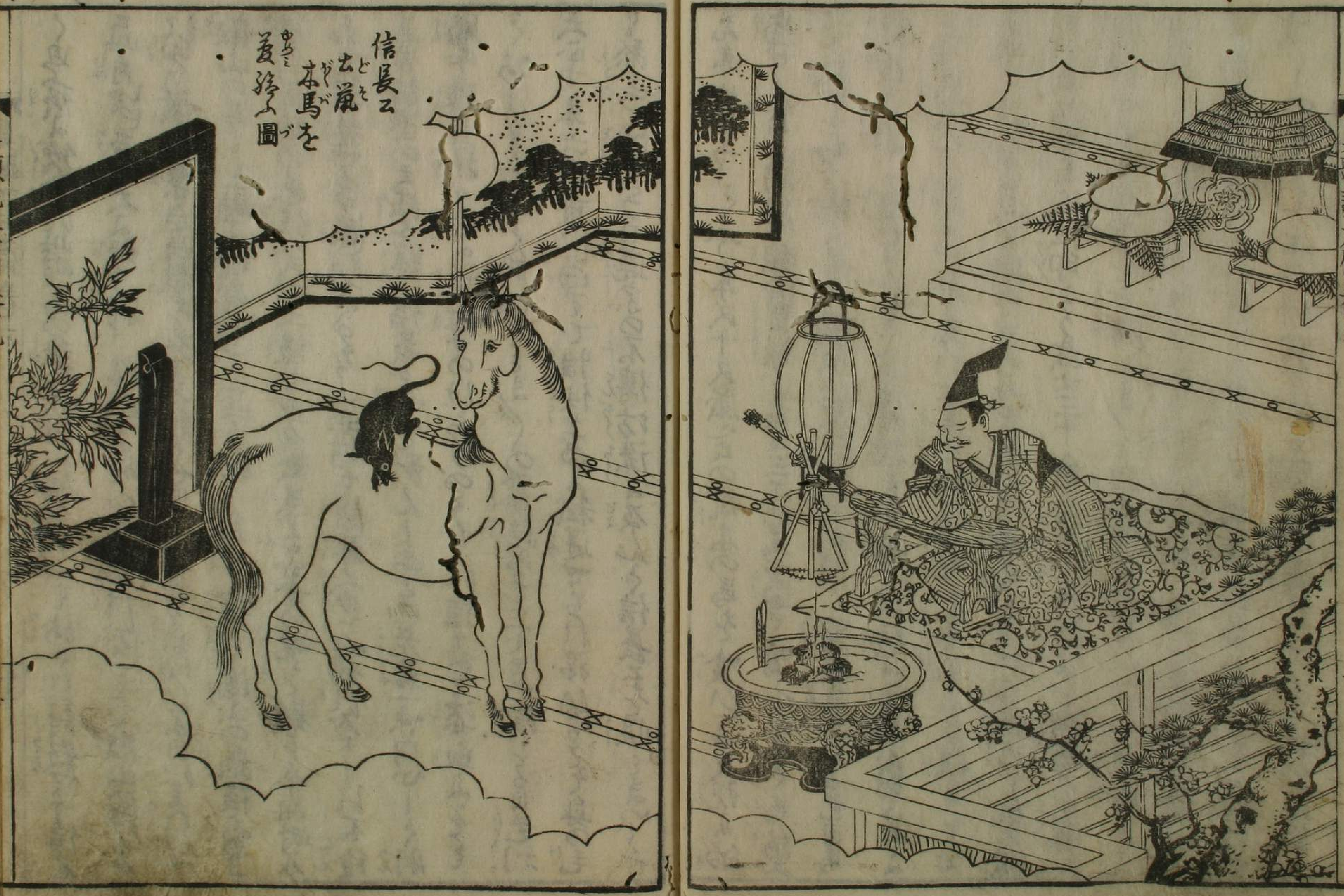
森蘭丸討死の圖

討おされたる御不方の侍九十余人挑ミ戦ひ居たりしに奥殿より火焔
出来て主に貫きたれバ今ハ信長公の御生害を察し誰がためにか冊と惚う
んとて敵と組でハ刺違へ討あひてハ命を落し一人も残りなく皆討
死を遂たりける

信長公凶夢。

人道下にハ情ゐバ効験天に見る陰謀多しといへども神その情を照覧を察し
戒を見して衆人君に告たまへり今年正月朔日の夜安土にお於ひて信長公
の御夢に公の鼠毛の馬と戦ひ終に鼠馬の腹を喰破りしかバ其馬忽
に死うせけると見給へり信長公陰陽師を召し圖夢させ給ふに唯て深き御
慎みのほどを申上る今に於ひて此御夢のさまを考るに惟任が叛逆
に相應せり信長公ハ天文三年甲午の御誕生光秀が生年ハ享禄

元年戊子にて今年五十五歳之公の鼠本の馬を喰ひしハ又現目的
当せり昔三國の時魏の曹操が夢に三疋の馬同じく喰ふと見て馬謖又
子が殺心を知り終に是を誅戮ス其後又三馬同く喰ふ夢と見る是司馬
仲達が殺心に應せり然れども曹操是を悟らざれバ終に司馬氏のために
天下を奪ハれ其子孫の身に於ける吉凶禍福悉く前表ありと雖も人ハ
みへざる事ハ實に不測のものなれバ此たる叡山に事の子細ありて衆徒擾
の代友松安友開祐法印より武士三千余人登山し戸障子を蹴破り器物を
踏碎き古老頭学を打擲しさまぐ狼藉に及びたれバ一山會合して
僉議しけるハ此山開闢以来斯る例ハいまだ定めし暴悪無道の事なる
まひ一く誅せんとすれバ叶はじと評定して彼三十余人の武士どもを欺きて
方ぐの寺へ分ち招き酒食をとりて厚く饗應し武士ら何の心得もなく

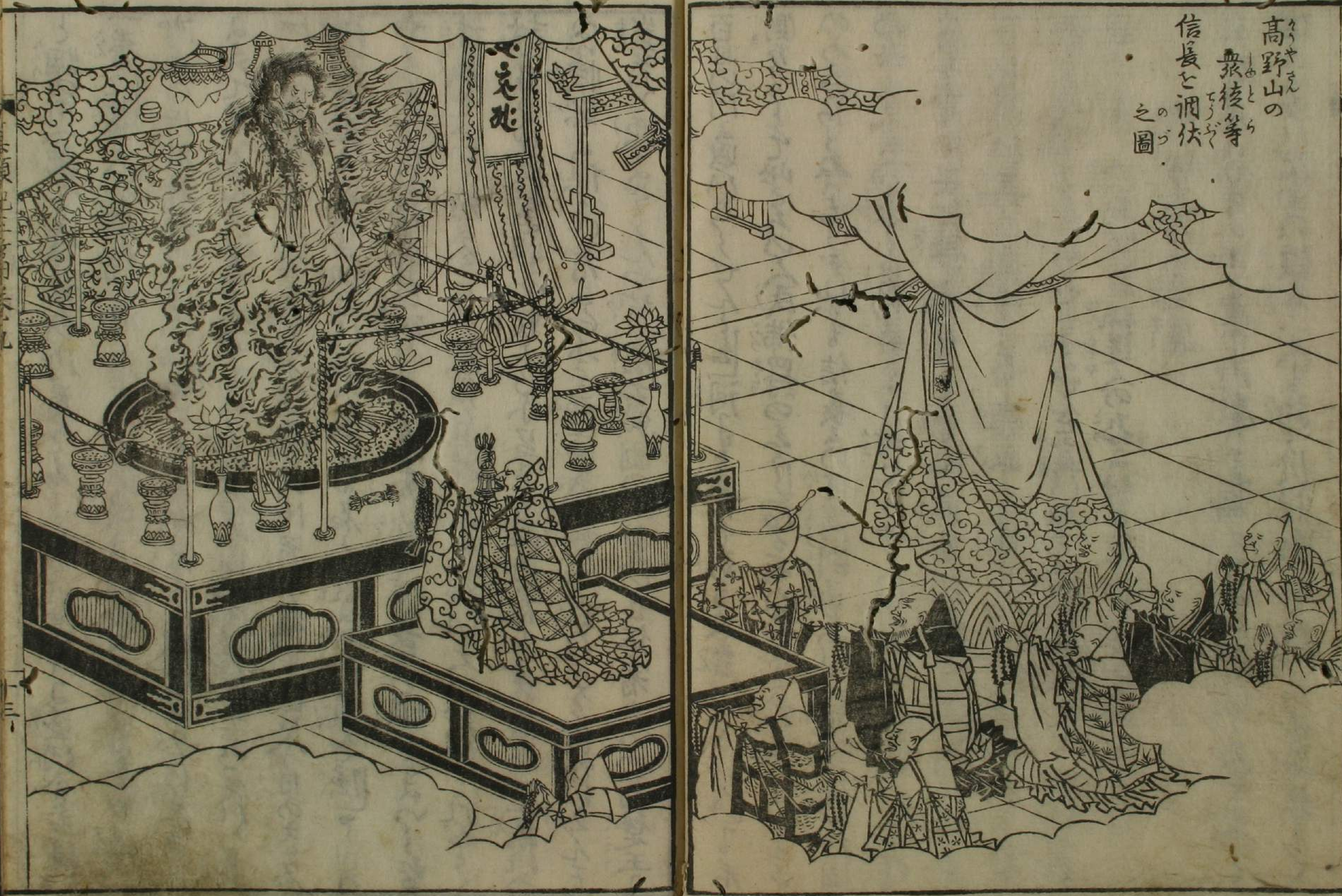

信長公出嵐木馬を愛玩ふ圖

く四ヶ度に飲食は此時一山の衆徒一同に押寄一人も残さず討殺せり信長
云此者ばら百達天に悖り給ひける此山を責亡ぼしてそ彼山の四方
江向ひ城を築き兵粮を数多籠させ置て軍勢を向ひ不日に責討は
叡山のごとく一時に焼亡ぼしと其身砦より宮中之依て満山の衆徒大きに
驚き天の師の悪法は又十五は億七千万歳善ある出世の暁を期と今此時に
至て将に絶せんとす悲しむべきなり然ども信長が強悪人力を以て動かすべからず不浄
真言秘密の大法を修し信長が命を断んとて一山の老若一味同心して肝
膽を砕き祈るに護摩のけむりのうちに信長が姿血に染て
くつがへりまた出ぐ絶法中さまぐの霊験ありて三七日の満ずる日悪納
天正十年六月二日に当りて惟任が為に弑逆せられ給ひたることそ身の毛
も弥立て恐しき又日蓮宗の不伝坊殊に及んで信長公を恨まいらせ

百日の内に逆ひまゐらせんと急ぎ祠りも遠からで彩る大変にいたり給ひしも居
測なりとて此ころの人民沸騰詛の言のしむるなるらんと私言しける
のみきならねども思ふに信長公の生得剛勇にして狐疑深く数国
の兵とさへ云へば悉く皆打亡さでは叶はざる毎にて御座なる夫国家を治
は民を本とし士を撫て爪牙をあんじ忠臣烈婦を賞しかひてこそ
万民慕ひ集り国治り天下泰平を謡ふなりしされば盗子も人を
殺を好嗜ざる者猶天下を一にせんと宜ひねるに信長公は荒く殺膽なき
ものゝ多く御座せし故殺逆人の為に討と給ふらんとぞ批判人侍る

明智左馬介遠慮

去程に本能寺の御座の御殿は是烟に及ひて猛火燃天を突く
焔より外れば小田の従卒一人も残らず討死し惟任方の勇士数多く



高野山の衆徒等信長を調伏之圖

と畑の内へ馳入く信長公の御首を取らんとし其中に蓮河舎右衛門
一番に進ミ入り奈を踏で御座の間へ飛込終に信長公の御首を白綾乃
御衣の片袖に撓みたる小押包ミ左馬介光春が前に差出し光春是
を見て是と見るにまがふべくもなかりね右大臣の御首にてありければ蓮
河を密に招きやがて足下信長公の御首を得たりし今日の高名
随一の戦私に思ふ子細あれば実度の高名と終に此御首を隠しやされ
やとて思ひ給ふ其訳は主人光秀深く信長公を恨みまいらせ
謀叛を企て終に今日の合戦悪神と呼ばれ給ひしおかくれなく
討給ふる臣たる恨を報ぜる小足士を此御首を光秀の見参に入
なば燐愍に堪ず首に向ふて悪言或は鞭打或は足もて踏にもあらん天
豈是を悪まざらんや昔唐土戦国の時楚の臣伍奢といふ者楚王に

殺さる其子伍子胥逃去て呉に仕へ終に呉の兵を起し楚を伐て勝
利を得右君平王の墓を堀て其尸を鞭打事三百伍子胥が友
申包胥といふ者伍子胥を諫めて子が讎を報ずる事甚しき哉人衆ければ
天に勝天定って又能人を破ると云々平王の臣下たりしが今其尸を鞭打事
かくおとし豈其天道極まらんやと云るが後果して伍子胥讒言
のために呉王より剣を賜ひ終に自刎て死し又の終を報ずるもかゝる
くればこと況や之は叛逆之足下光秀に忠ならば唯此首は深く隠し
置れども云れんこそせめて光秀度の罪を遁るゝ者ならん
足下よろしく思慮を加へ誤るすなかれと云蓮河舎右衛門是を聞
大に感じ之に随ひ御首は深く隠し後阿弥陀寺の面誉上人に計て
御首を密に葬り追福供養を執行ひたる左馬介が深慮乃難

伍子胥平王の墓を掘く圖

とぞ云なしたりける扨も惟任が軍兵面々右大臣の御首を需め捜せども曽て見えざりしとや然るより光秀大に怒り斎藤内蔵助利三をもつて再び御首を捜させしむ左馬介密に斎藤を招き御首を隠せし次第詳に物語り只今まで需め得ずとて止みしと云内蔵助も此儀に同じ相計て彼焼残りたる白綾の小袖を持て光秀に捧げ御首は需め得ざれども右大臣の御衣の小袖血に染て火中に在しは御生害疑ひなく覚へさしも武名の御首なれば近士小姓の者ども持去りつらん骸骨をさへ脇らしめざりしは実に神ひて光秀始めて心を安んじ且かの御衣を見るさまく悪言し終に縫刀を抜んで寸々に斬裂き又内蔵助光秀を見て左馬介が恩の忘れざる故密に感じぬ此合戦に信長公を実為なりし安田作兵衛は蘭丸が為に首を負ひ去りし引続き居たりしが秀吉天下

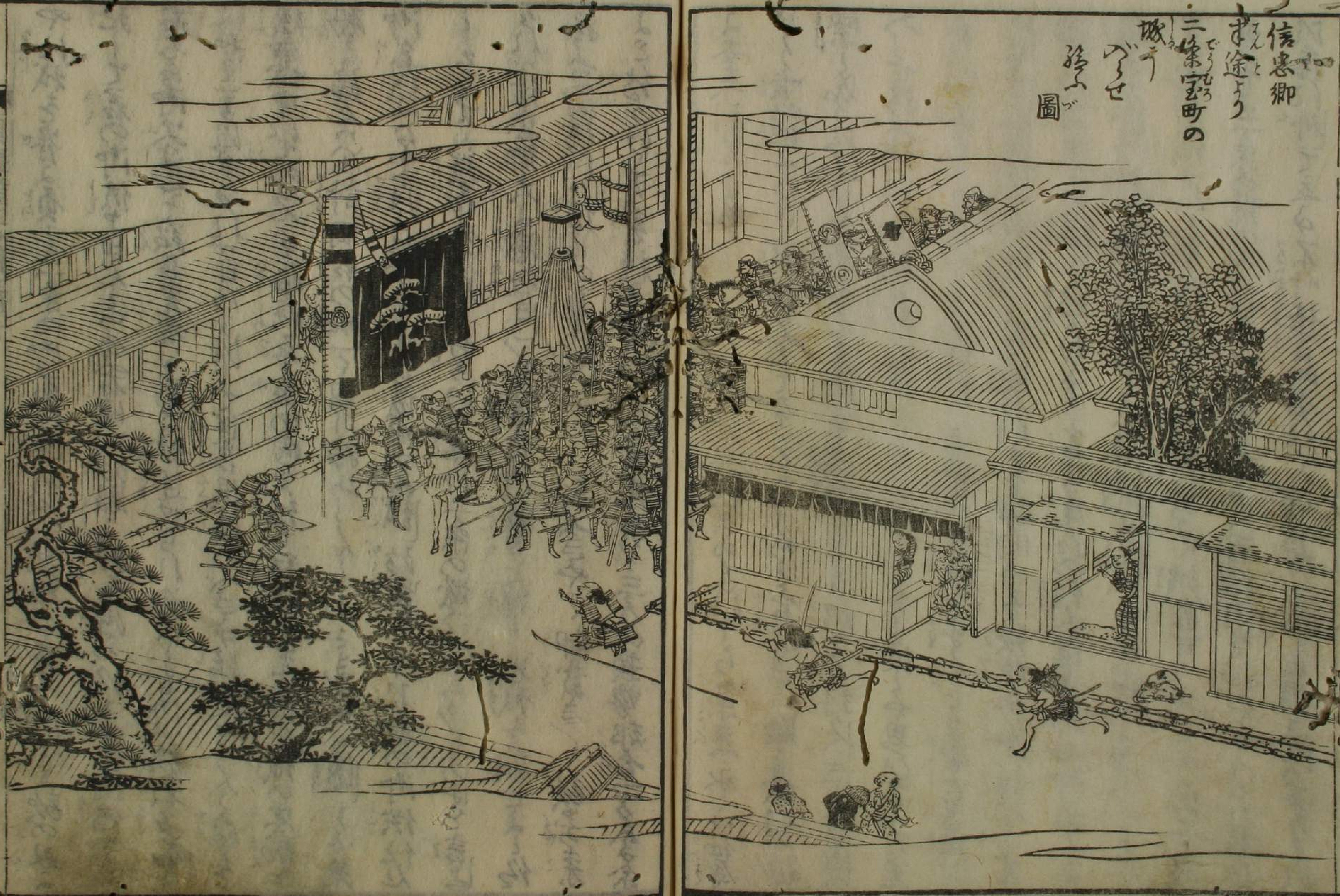
の主と成給ひし安田が信長公を仕留しを悪み給ひたりしかば名を天野源右衛門と改め暫く潜み居たりしが遂に筑後九州の諸侯に仕へ禄八百石を領しけるが不思議なく面に腫物を発し漸々腫潰れ痛み強く源右衛門是を憂て自裁して死したりける

惟任光秀囲二條城

三位中将信忠卿は二条の城に宿り給ひしが光秀の叛逆を企て本能寺を取囲み夜討の急を聞せ給ひ甚騒ぎて後詰して父を救ひ給はんと合軍兵僅百余人を引率し馬に鞭をあげ駈せ給ふに落武者三騎馳来り御馬の前に跪居涙を流して本能寺は落居し右大臣既に薨去ありしと告まうしぬと言よれば信忠卿猶驚き遥に本能寺の方を見給へば実にも左ありと知りまして猛烟空中に逆散せる中ね忽焔くれぐれせんと思召

を出し給ふ所に所司代村井長門守は又春長軒は作右衛門尉貞成をつれ来りて申けるは右府既に生害まし〳〵今は彼所に向ひ給ふとも其甲斐なかるべし途中にて不慮の支戦利あるべからず一先要害に引籠り給ひ諸勢をも待揃て一戦あるべしと申ければ妙覚寺に宿り給ふ小田源三郎勝長は又十郎長利一族九郎次郎は甚七郎は小沢治猪子兵介村井が従兵別宿の諸士馳追て集り上下七十余人なりけるが彼ども以附信長公も生害まし〳〵光秀が軍勢利刀の行を破形勢にて京中に充満しされば先に勇気を呑されん洛中にて闘んとする者なく安土又は岐阜両城へ御引ありて諸方の恩臣勇士を召集て義旗を挙らるべしと申者許之信忠卿仰けるは光秀かく迄根深き大逆を企る程の者が新所坂本及び宇治瀬田其外の村々里々に兵を分て固めざる事やあるべき慮

に安土へ引んとて路上にて雑兵賤子の手にかゝらば未来永々迄恥辱なり唯此地にて戦死せんこそ本意なりと宣ひければ誠に武門の棟梁とも成り給ふべき器量なりと諸軍感涙を催しけるより引こもり二条の城へ入らせ給ふ諸方より馳集りし軍兵とも此旨を伝へ聞けるに程なく思ひ入又は光秀にや与志てりけん心々に落行て其残る猪々義を守んとする勇士纔に八百余人籠城し各指口々を固め門々を押開き弓鉄炮を待て討死と覚悟し此城に光秀を遅しと待かけける爰に尾張の住人信忠卿の御家人に梶原左衛門尉が嫡子松千代十三歳御供に従ひて在京せしにきのふより暑邪に侵され大熱焼がごとく町宿にありて消息せられしに今朝本能寺并に二条の城の有様を聞て家来梶原右衛門を招きやうるは我此頃病に臥て立も不叶後に此所にて泳め居たりしも口惜き次第なりと

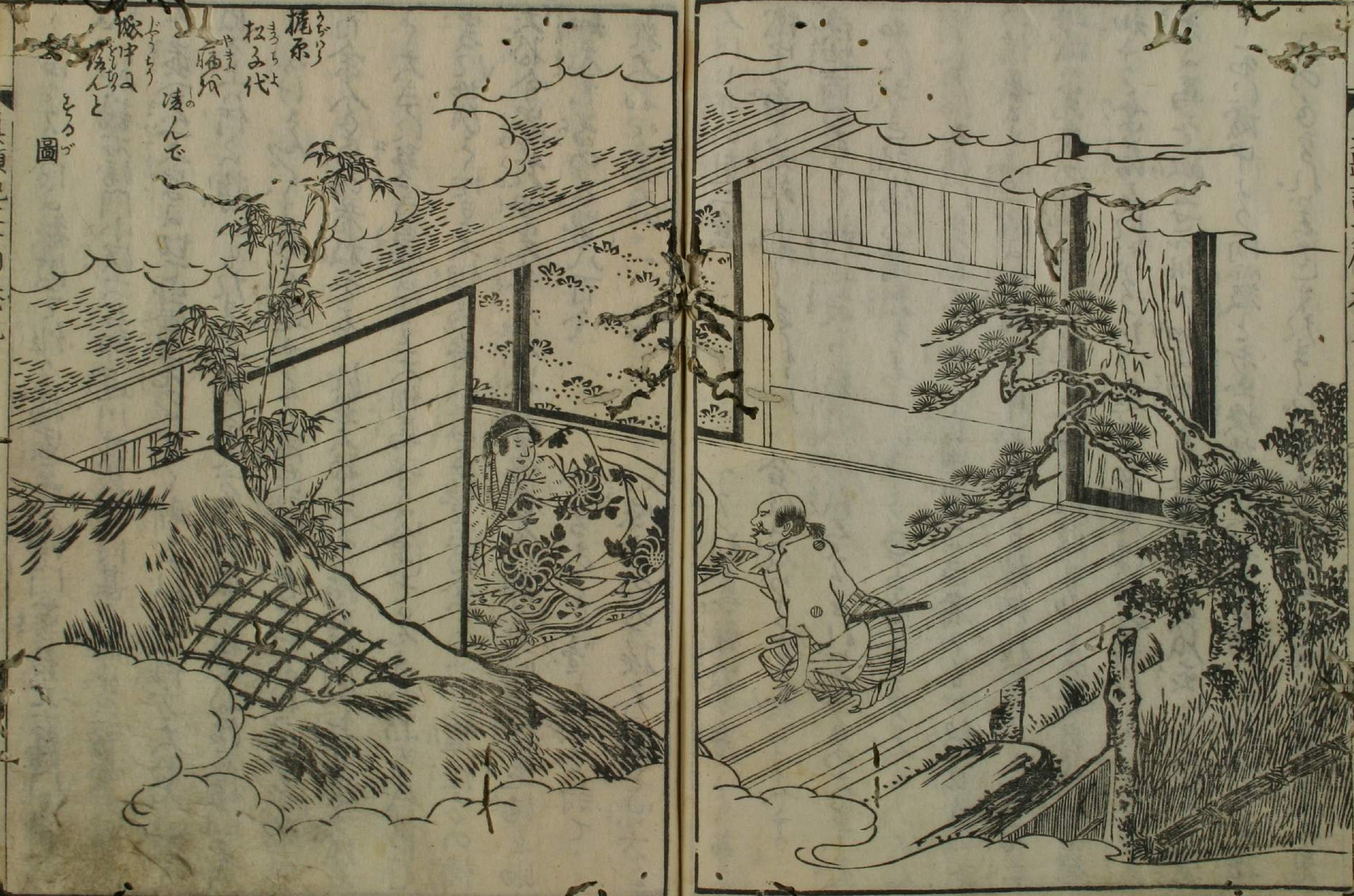


信忠御中途より二條室町の城へ押よせ給ふ圖

真顕記三篇巻九

や旗職を脊に負ひ二条の御所へ連行しが合戦にてそれしども敵の刄に
死して君の御供申さんとて又右衛門双眼に涙を浮め給ふさるにも候へども
右大臣御父子を叛臣光秀が為に弑逆せられ給ふも御一族数多、
に於てましまさば日ならずして逆臣退治あるべき事治定せり今痛を
凌ぎ城中にて死なんより病疾平癒の時を待て叛逆人光秀誅伐の忠勤を
励し給んには計両君の嬉しく思し給ふらんとさまざまに諭しとぞ説
御名代には不肖に候へども小臣城中へ馳入防戦して中将殿の御供仕らん
と云もはてず鎧を肩に打かけ二条の城へ赴かんとするの時言上
すれば信忠卿大に感悦ましく自ら御長刀を賜り忠戦を期せよと給
ひし又右衛門は信臣の身の面目此上のあるべきやと押戴き欽んで
よと給ひける去程に惟任日向守光秀が三万余の軍勢都合二万余余

人同日午の刻二条の城を押寄三方より引囊鯨波を挙たり
城中兼て必死と期しければ門を合はに及ぶこそ無ちうくべき弓
鉄炮雨のごとく打立放ち厳しく防戦きてけれど寄手の大軍矢
玉におそれ死傷の者数多ありければ進みかねて見へたる大将乃大ね
明智治右衛門光忠大に怒り言甲斐なき者どもが紛まひ乱れ計
の信長公も唯一時に討死して中将殿の分際何程の事かあらんと采
此城は光秀の縄張して築きし物なれば堀まりくの要害我能
知りたる所なり進めや者共続けやつづけと呼て自ら
先に馬を乗込せば此下知に励まされ無二無三に乗越して我劣らじと進
み寄に城中より雨霰と打出す鉄炮一つ大将治右衛門が胸板を打抜
大将の手なればさしもたまらで馬より逆しまにどうど落るを見ん


梶原松子代病所の
凌んで
城中へ
忍んとする
圖

を帯より二門に鎗波を作り福富平左衛門菅谷九右衛門毛利新
助平助勘右衛門小沢六三郎逆川甚五郎同甚六郎等三百余人鋒先
を並べ真一文字に切て出雷光のごとく斬立れば惟任方大勢を討せ
ぬる上は何かは猶しもたまるべき只角八方に切崩され大勢右衛門と肩
にかけさんざんに逃さりける城兵は勝に乗て切廻れば討るる者二
百余人手負の者数をしらず然に無大ね光秀の浩右衛門が打出てる程見
て大きに驚き急に四王天但馬守に命じて先手の者を代らしむ
爰に於て四王天但馬守政孝手勢三百余人其外惟任方の侍
大将今峯判兵衛光之尾石忠武並田並八郎武政中沢豊後之助
細元茂等の手勢八百余人大波の寄るごとく噇と喚て討てかかる
敵大将四王天鞍笠より至忠味方の為横合に敵と味方に

合とされば九牛が一毛何程も進まざるぞ先我手並を手本にせよと
鎗を上て突入ければ惣軍抑くまじと勇み進み勝誇て城
兵を討つつ門扉を削て鍔を破火と激してぞ戦ひける双方必
死の戦なれば逃て恥を残さじと踏込て喚き叫ぶ其声は山川に響
大地も裂る計也福富平左衛門は名を一世の末代に残さんと太刀真向に
さしかざし向ふ敵を嫌ひなく竪に切居横に薙伏せ及も柄も折るまで
と激しく当て戦ふ程ぞ討る者数をしらず惟任方小嶋三郎
右衛門と渡り合秘術を尽しておお合が数刻の合戦力労れ遂に小嶋
に討れる菅谷九右衛門も清もはくいって戦ひ敵の侍大将菱田並
六郎を馬より下に切て落し其も進んで四王天が組下の勇士桐左右
と渡り合て力戦せしが是も左右に討れる毛利新助は惟任勢

政重三右衛門と戦ひ相討ごとく討死し其外勇士強卒八十六人戦
強をれバ惟任方にも今峯相母中澤造酒之助加藤清次郎等百余
人討死せし大将信忠御も宛ぬの思ひ出ぞと發軍せんとて大威の
猛に龍頭の甲の緒をしめ長刀追取先に馬を踊らせ纏出給ふんで
城兵進の猶豫をさせ小田源三郎勝長又十郎信次九郎次郎勘七
郎小菅治を始とし侍大将鎌智十郎利高二百余人我當と差出
縦横に切廻れバ光秀方是を見て中将殿の討出給ふぞ我討止
てん名に備へんとて明智十郎右衛門光近此本田源左衛門勝定献
蔵内甚介利之等不当の勇兵又百余人切先を並へ追立て戦ふ
斯て両軍互に今日を限りと思ひ定め軍ふれバ斬ども突ども歴
々こそ多勝が百勝百勝に勝に如とも引退じと退出退久し

討つ討れつ戦ひしハ剛なる次第なれども城兵必死と究期の
猛者なれバ勇ミし惟任勢ハ度毎に打負る見へたれバ三宅兵衛
松田太郎左衛門加治石見守三牧勘兵衛等六百余人の新手を
以城兵の横合より無二無三に突崩せバ心ハ矢竹にはやれども新手の
大勢凌ぎがたく城兵討るゝ者数を志らず此ハ小田源三郎勝長明智
十郎右衛門光近と鎗を合せ双方秘術を尽し戦ひしが勝長若て
真一文字に突入る鎗を光近透して刎上げ馬の首を横様に薙
ゐる小馬驀きてるを大地へ斬落すを光近手早く突つき通し首
取て退しより其外一族又十郎信次も斎藤内蔵助に討ち完
後の者ども十八人上下百二十余人討死し光秀方にも手負死人三百
余人に及んで互に息を継居たり此時中将信忠卿敵兵三千余人を薙

明智治左衛門
先駈の圖

返して切通しにて二ヶ所の負疵を蒙ひ殿上へ引退き暫休息いたし居たる所
此時信忠卿の近習の士に斎藤新五郎長龍と云者あり是の美濃の
太守斎藤龍興が叔父也が先年斎藤家滅亡の時は未だ幼稚なりしが
元来斎藤の家名をも相続させんとて信長公憐愍ありて養育し
給ひける長じて忠義勇壮衆に越たる武士なれば中将殿へ進らせ
幼君悉を守もり勤仕する今日天命を殆るの期に臨んで先まづ先に
馬を駆出し敵を討る首を多くとれども退く心露計もなく只切死ぞ
と覚悟して悪戦もろうり敵に對されば中ね信忠卿も陣中へ引入
給へども猶も進んで戦ふなぞ惟任方比田七兵衛武教と名乗新五郎
を討んと馬を並よせ槍を合せ飛違ひ馳ちがひ死生の勇を挑みける
に比田七兵衛終に叶はで新五郎に討れける是を見て惟任方の勇士
我討留んと進み来る其中にも名ある士とて威ある鑓を着十文字の鎗提
馬を躍らせ大音にて罵りけるは勇ましく長龍が光秀が股肱に
列れたる斎藤内蔵助利三之軍に親族の譜代一族なるが一方の大将
せんとて切てかゝれるを新五郎長龍大に怒り君を弑する叛賊に与する
不忠の悪人族とは穢れし手並を見よやと叫りつゝ槍を取て突来る奴
方手練の勇者なれば流石寄付ず逃暫く勝負も見えざりけるが少しばらくするや
斎藤新五郎今を戦ひ力も労れ内蔵助が討込たる刀を受損じ腕を
深手計眼をうけて切付られたるの手なれば馬よりまろび落る所
を内蔵助が郎等押へて首をとりける

繪本太閤記三篇巻之九終